

場面2 生徒G, 生徒H, 生徒Iは、発表の相談のため再び集まり、次の会話をしている。

H：専門家と専門家ではない人とのコミュニケーションの難しさは、医療だけに限らないようだよ。でも、人の命に関わることだから、わからないでは済まされないよね。わからないことはわからないと積極的に発言して、医師や医学研究者に任せきりにならないようにしなければいけないね。子どもじゃないんだから、(d)自立しなくちゃ。

G：医療だけでなく科学全般に、一般市民がもっと興味を持って、専門家と協力し合う社会を作っていく必要があるね。科学は万能ではないからこそ、科学だけですべてを解決しようとするべきではないし、かといって科学を無視してもいけない。Iさんはどう思う？

I：私は、aが必要だと思う。

G：なるほど。でも、bんじゃないかな。

問4 下線部④に関連して、親への依存から自立へと向かう青年期について、次のア～エの特徴と、それを明らかにした後のa～dの人物の組合せとして最も適当なものを、後の①～⑧のうちから一つ選べ。26

ア 青年期は、子どもの集団にも大人の集団にも属さない周辺的な存在となる時期である。

イ 青年期は、自分が何者かわからなくなるアイデンティティの危機に陥る時期である。

ウ 青年期は、親の保護や監視から離れて精神的に自立していく心理的離乳の時期である。

エ 青年期は、生物としての誕生に対する第二の誕生として自我に目覚める時期である。

a エリクソン b ルソー c レヴィン d ホーリングワース

- ① ア—a イ—b ウ—c エ—d
- ② ア—a イ—c ウ—b エ—d
- ③ ア—a イ—d ウ—b エ—c
- ④ ア—c イ—a ウ—b エ—d
- ⑤ ア—c イ—a ウ—d エ—b
- ⑥ ア—d イ—a ウ—c エ—b
- ⑦ ア—d イ—a ウ—b エ—c
- ⑧ ア—d イ—b ウ—a エ—c

問5 次の(1), (2)の問い合わせに答えよ。

(1) まず、あなたが場面2の会話文中の空欄 **a** に当てはめたいと思う発言を、次の①と②のうちから一つ選べ。なお、(1)で①と②のいずれを選んでも、(2)の問い合わせについては、それぞれに対応する適当な選択肢がある。**27**

- ① 一般市民が正しい科学的判断ができるよう科学教育を徹底すること
- ② 専門的判断は専門家に委ねること

(2) 次に、空欄 **b** に当てはまる、(1)で選んだ発言に対する懸念・反論として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。**28**

- ① 科学的判断が絶対的なものではなく、人間的な感情や心からの納得といったことが重要な判断要因になる場合もある
- ② 一般の人々の利益になる研究結果でない限り、科学研究の真の目的は達成されたことにはならない
- ③ 反証可能な言明でないと科学的言明ではないということを考慮して、科学と非科学の間の区別をつけることが大事だと言える
- ④ 科学は連続的に進歩するのではなく、パラダイム転換により非連続的に進歩するということを考えないといけない
- ⑤ 一般市民に科学的な知識を伝えるメディアは、事実を客観的・中立的・網羅的に報道している
- ⑥ 皆が学校で科学を学んできたはずなのに、それでも血液型性格診断みたいに科学的根拠のない疑似科学を信じる人も多数いる

第6問 「倫理」の授業で、「社会と文化に関わる諸課題」から課題を選び、グループで探究する学習を行うことになった。生徒J、生徒K、生徒Lのグループは、「異文化理解」をテーマにして、資料を探しながら意見交換を行った。次の会話文1と後の会話文2を読み、後の問い合わせ(問1～5)に答えよ。(配点 16)

会話文1

J：日本でも外国人人と接する機会が多くなったけど、外国人とのコミュニケーションでは相手の文化を知ることが大切だね。文化が違えば、立ち居振る舞いから異なるし。

K：私は文化の違いを認められる自信があるよ。

L：本当かな。^a文化の違いを認めるることは簡単ではないからこそ、異文化理解が強調されているんじゃないかな。

K：他の文化を差別しない自信もあるよ。

L：でも、^b文化の違いを背景にした対立や衝突は世界中で起こっているよ。異文化が存在するって、そもそもどういうことかな。

J：『野生の思考』を著した ア は、 イ ようだよ。参考になるかもしれないね。

問1 下線部①に関連して、次の文章は、課題探究において先生Rが異文化理解の問題を解説したものである。この文章の内容の説明として最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。 29

私たちちは異なる文化を理解しようとするとき、自分もまた一つの文化の中で思考しているということを忘れがちです。自文化に固有の視点から異文化を評価し、価値づけてしまっていることに、なかなか気づきません。無意識に自文化を絶対化している場合もあります。異なる文化を生きる人たちと関係を築く以前に、そもそも私たちは、自分の文化について十分に理解していると言えるのでしょうか。むしろ異なる文化に接触し、何らかの違和感があったとき、それが自分たちの文化について見つめ直すきっかけになったりします。自分たちの文化を基準にしているから違和感があるのです。要するに、異文化理解は自文化理解でもあります。どの文化も同等の価値があると認めることができれば、異なる文化を生きる人たちと友好な関係を築くこともできるでしょう。

- ① 誰もが自分たちの文化から異なる文化を評価せざるをえないのだから、異文化の排除を無理に避けなくともよい。
- ② 文化が国際基準に照らして劣っている場合、異なる文化を生きる人たちとは友好的な関係を築くことはできない。
- ③ 異文化理解のもとで自文化の優秀性を再確認しながら、異なる文化を生きる人たちと交流すべきである。
- ④ 異文化を自文化の視点から理解するのではなく、どの文化も同等の価値があると認めることができます必要である。

問2 下線部⑥に関連して、文化の違いの問題を考察したサイードの思想についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 30

- ① 西洋文化から見たアジアや中東に対する一面的な理解をオリエンタリズムと呼び、オリエンタリズムがヨーロッパの植民地支配を正当化したと考えた。
- ② 東洋諸国による自文化の価値の再発見をオリエンタリズムと呼び、オリエンタリズムがヨーロッパの植民地支配に対する抵抗運動を促したと考えた。
- ③ ヨーロッパによる植民地支配の終焉と共に東洋文化に対する潜在的な劣等感が西洋文化に生じたと指摘し、これをポストコロニアリズムと呼んだ。
- ④ ヨーロッパによる植民地支配の終焉と共に西洋文化に対する潜在的な優越感が東洋文化に生じたと指摘し、これをポストコロニアリズムと呼んだ。

問3 会話文1中の空欄 [ア] には次の人名 a か b、空欄 [イ] には後の記述 c～e のいずれかが入る。 [ア]・[イ] に入る人名と記述の組合せとして最も適当なものを、後の①～⑥のうちから一つ選べ。 31

空欄 [ア] に入る人名

- a リオタール b レヴィ・ストロース

空欄 [イ] に入る記述

- c 西洋文明における科学の抽象的思考に対して、未開社会は西洋文明に劣らず厳密な深層構造があると考えた
- d 世界全体を解釈する「大きな物語」ではなく、個々の具体的状況の中で思考する「小さな物語」が求められると考えた
- e 冷戦後、イデオロギーの対立がなくなった代わりに、宗教対立などの「文明の衝突」が起こるようになるとを考えた

- | | | | |
|-------|-----|-------|-----|
| ① ア—a | イ—c | ② ア—a | イ—d |
| ③ ア—a | イ—e | ④ ア—b | イ—c |
| ⑤ ア—b | イ—d | ⑥ ア—b | イ—e |

会話文2

J：やっぱり、自文化をよく知らずに異文化を理解することなどできないんだね。

K：異文化に触れると、当たり前のように思っていたことも自文化だけのことだと気づいたりする。

L：まずは異なる文化を受容する能力が必要だな。外国語の習得とか。

K：国際的な交流が増えてきているからこそ、そういう能力を身につけなければいけない。^(c) 教育が果たす役割は大きいよ。

L：自分とは異質な^(d) 他者と出会ったとき、避けたり差別したり、排除したりする人もいるけど、受け入れる寛容さが大切だね。

K：異文化理解を通して、様々な人たちが共生できる社会を目指していかないと。

問4 下線部④に関して、生徒Jたちは、生徒Lが見つけた次の資料をもとに、異文化理解における教育の果たす役割について話し合った。資料の内容の説明として適当でないものを、後の①～④のうちから一つ選べ。 32

資料

多様な人々との日常的な交流が拡大する中にあっては、異文化や異なる文化をもつ人々を理解するだけでなく、理解した上で、それらを受容しながら共生することのできる力が重要となる。この力とは、相互の歴史的伝統・多元的な価値観を尊重しつつ、多様な異文化や人々の生活・習慣・価値観について違いを違いとして認識し、創造的な関係を構築する態度や能力であり、他者とのかかわりを通して問題を解決し、葛藤や対立を乗り越えてよりよい人間関係を作り出そうとする態度や能力である。また、そのためには、共存共栄的な発想を身に付けたり、一国の利益追求のみによらない全地球的視野や国際社会に貢献しようとする公共心、知らないことや理解できないことにも柔軟に対処する能力などを育成していくことが必要である。

異文化や異なる文化を有する人々に対して敬意を払い、理解し受容することは、自分自身の国やその歴史、伝統・文化を理解・尊重し、その上に立脚した個性をもつ一人の人間として自己を確立することによってはじめて可能となる。そのためには、自らを知り、自分らしさを受け入れ、自分なりの判断基準を持ち、国際化した社会の中で生きる個人としての価値観を形成していくことが必要である。

多様な他者の中で、自己を確立し相互理解を深め、共生していくためには、対話を通して、人との関係を作り出していくような力が求められる。そのためには、自分の考え方や意見を自ら発信し、他者の主張を受け止め、議論をまとめあげ、具体的に行動することのできる態度・能力が必要となる。

(出所) 文部科学省「初等中等教育における国際教育推進検討会報告——国際社会を生きる人材を育成するために」

- ① 自分の国だけでなく世界の人々の利益となることを求め、国際社会に貢献しようとする、公共心の育成が必要である。
- ② 異文化を有する人々と共生するためには、相手と対立しないように自己主張を抑え、相手を受け入れる寛容さが重要となる。
- ③ 自分の考えや意見を発信し、他者の主張を受け止め、議論をまとめあげ、具体的に行動することのできる態度や能力が必要である。
- ④ 多元的な価値観を尊重し、多様な異文化や人々の生活・習慣・価値観についての違いを違いとして認識する態度や能力が重要となる。

問5 下線部④に関して、次のア～ウは他者について考察した思想家の説明であるが、それぞれ誰のものか。後のa～cのうちから一つずつ選び、その組合せとして最も適当なものを、後の①～⑥のうちから一つ選べ。33.

- ア 他者は自己を無限に超越して「顔」として現れ、自己の存在へ固執する私に倫理的な命令を呼びかける。
- イ 人間は他者の視線にさらされながら、対他存在として相手の身体を物体化し、自由を奪い合う相克関係にある。
- ウ 自己は他者と共に存在し、眞の自己を目指す者同士の実存的交わりによって、実存としての自己を開明する。

a レヴィナス b ヤスパース c サルトル

- | | | | | | |
|-------|-----|-----|-------|-----|-----|
| ① ア—a | イ—b | ウ—c | ② ア—b | イ—c | ウ—a |
| ③ ア—c | イ—a | ウ—b | ④ ア—b | イ—a | ウ—c |
| ⑤ ア—a | イ—c | ウ—b | ⑥ ア—c | イ—b | ウ—a |

第5問

問1 [23] 正解①

①は正しい。「患者の権利に関する WMA リスボン宣言」を資料1とする設問である。患者は「自分自身に関する自由な決定」を行うための「自己決定の権利」を有し、医師は患者に対して「その決定のもたらす結果」を知らせるものとする。このように資料1は述べている。

②は誤り。医師は「情報が患者自身の生命あるいは健康に著しい危険をもたらす恐れがあると信ずるべき十分な理由がある場合」は知らせなくともよく、患者は「他人の生命の保護に必要とされていない場合」に限り、情報を知らされない権利を有する。このように資料1は述べている。「いかなる場合でも例外なく」という部分が誤り。

③は誤り。患者は「必要があれば自分に代わって情報を受ける人を選択する権利」を有し、医師は「法律に明確に規定されている場合」や「厳密に「知る必要性」に基づいて」のみ他の医療提供者に開示することができる。このように資料1は述べている。「医師は、患者が自分の情報を第三者に与えることを求めても、それに応じてはならない」とは述べていない。

④は誤り。患者の子孫は「自らの健康上のリスクに関する情報を得る権利」もありうる。このように資料1は述べている。「医師は、患者の死後も守秘義務があるので、患者の子孫に情報を与えてはならない」とは述べていない。

問2 [24] 正解④

④は正しい。「シンギュラリティ」とは、「AI」が人間の知能を上回り、新しい世界を作り出していく予測不可能な時代への転換点のことで、例えばレイ・カーツワイルは2045年と予測した。

①は誤り。「プライバシー」の権利は、憲法第13条の幸福追求権に基づく基本的人権の一つで、プライバシーの保護のために表現の自由が制限される場合もある。

②は誤り。「デジタル・デバイド」とは、インターネットやパソコンなどの情報通信技術を利用する能力の格差のことである。「コンピュータやネットワークの仕組みを悪用し、他人に損害を与える行為」はサイバー犯罪である。

③は誤り。「情報公開法」は、政府の説明責任を明らかにし、中央官庁の行政文書の原則を義務づけた法律であるが、個人情報や国の安全保障などを含む六項目は不開示であり、国会、裁判所は対象となっていない。

問3 [25] 正解④

④は正しい。国立環境研究所「社会対話『環境カフェ』

科学者と市民の相互理解と共感を目指す新たな手法」を資料2とする設問である。2011年の東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故を契機に、科学者が「市民との対話と交流に積極的に参加すること」、「社会に向き合う科学」が取り上げられ、科学技術の限界や不確実性を踏まえた「社会への発信と対話」が重視されるようになった。現代の科学技術と社会の接点においては、環境問題のように「科学に問うことはできるが、科学が答えることができない問題群」が存在するが、こうした問題群は科学者と一般市民が情報や知識、価値観を共有したうえで解決すべきであると考えられている。このように資料2は述べている。したがって、科学に問うことはできるが、科学が答えられない問題については、「科学者が一般市民と対話して解決すべきである」と考えられる。

①は誤り。環境問題は「科学に問うことはできない」とも、「行政が意思決定の場となる」とも、資料2からは考えられない。

②は誤り。環境問題は「行政が解決すべきである」とは、資料2からは考えられない。

③は誤り。科学に問うことはできるが、科学が答えない問題については、「科学者の内部の問題にとどめておかなければならない」とは、資料2からは考えられない。

問4 [26] 正解⑤

「青年期」の特徴を明らかにした人物について判断させる設問である。

Aはc「レヴィン」が明らかにした特徴である。レヴィンは、ドイツ生まれの心理学者で、青年期にある人を子どもの集団にも大人の集団にも属さない周辺人・境界人(マージナル・マン)として特徴づけた。

Iはa「エリクソン」が明らかにした特徴である。エリクソンは、ドイツ生まれのアメリカの精神分析家で、人生を八つの発達段階からなるライフサイクル(人生周期)に分けた。エリクソンによれば、青年期は、子どもであることに満足せず、かといって新しい自分も見定められず、中途半端な状態で不安や空虚感にとらわれるアイデンティティの危機(拡散)に陥りやすい。

Wはd「ホーリングワース」が明らかにした特徴である。ホーリングワースは、アメリカの心理学者で、青年期における精神的な自立を乳児の乳離れにたとえて心理的離乳と呼んだ。

Eはb「ルソー」が明らかにした特徴である。ルソーは、フランスの啓蒙思想家で、『エミール』で「われわれはいわば二度生まれる。一度目は生存するために、二度目は生きるために。一度目は人間の一員として、二度

目は男性として、女性として」と述べた。

問5 [27] 正解① または②

[28] 正解⑥ ([27] が①の場合)

正解① ([27] が②の場合)

[b]には、[a]に対する懸念や反論が入る。

① 例えば、重篤な病気に罹った患者が医師の薦める治療方針よりも自分の納得できる選択をした方が患者本人のためであるように、科学的判断よりも人間的な感情や心からの納得が必要である場合もある。これは(1)②「専門的判断は専門家に委ねる」という考え方への反論である。

② 科学研究の目的は何かということは、(1)①、②いずれの主張とも無関係である。

③ ある言明が科学的かどうかという話は、(1)①、②いずれの主張とも無関係である。

④ 科学がどう進歩するかは(1)①、②いずれの主張とも無関係である。

⑤ メディアは必ずしも事実を客観的・中立的・網羅的に伝えているわけではない。

⑥ 学校で科学を学んでいても疑似科学を信じる人が多いいるということは、(1)①への反論である。

第6問

問1 [29] 正解④

④は正しい。私たちは異なる文化を理解しようとするとき、自分もまた一つの文化の中で思考していることを忘れないであり、そもそも自分の文化について十分に理解しているわけでもない。むしろ異なる文化に接触し、何らかの違和感があれば、それが自分たちの文化について見つめ直すきっかけになることもある。どの文化も同等の価値があると認めることができれば、異なる文化を生きる人たちと友好な関係を築くこともできる。このように先生Rは述べている。つまり、「異文化を自文化の視点から理解するのではなく、どの文化も同等の価値があると認めることができるとます必要である」と述べているのである。

①は誤り。先生は、「異文化の排除」を無理に避けなくてよいとは述べていない。

②は誤り。先生は、「文化」を「国際基準」に照らして評価すべきだとは述べていない。

③は誤り。先生は、「自文化の優秀性」を再確認しながら交流すべきであるとは述べていない。

問2 [30] 正解①

①は正しい。「サイード」は、パレスチナ系アメリカ人の文学研究者・文明評論家で、「西洋文化から見たア

ジアや中東に対する一面的な理解」である「オリエンタリズム」の問題を指摘した。サイードは、「オリエンタリズムがヨーロッパの植民地支配を正当化した」と考えた。

②は誤り。オリエンタリズムは、「東洋諸国による自文化の価値の再発見」ではない。また、サイードは、「オリエンタリズムがヨーロッパの植民地支配に対する抵抗運動を促した」とは考えていない。

③は誤り。サイードは、植民地支配の歴史によって形成された抑圧や偏見が、植民地支配からの独立後も引き続いている状況を批判し、「ポストコロニアリズム」の理論を提唱した。ポストコロニアリズムは、「東洋文化に対する潜在的な劣等感が西洋文化に生じた」ことではない。

④は誤り。ポストコロニアリズムは、「西洋文化に対する潜在的な優越感が東洋文化に生じた」ことではない。

問3 [31] 正解④

会話文1中の空欄に入る人名と記述の組合せを選ばせる設問である。

[a]はb「レビュイ・ストロース」が入る。レビュイ・ストロースは、フランスの文化人類学者で、西洋文明の思考が抽象的思考であるのに対し、未開社会の思考が具体的思考であるとして、これを「野生の思考」と呼んだ。a「リオタール」は、フランスの哲学者で、世界全体を解釈する思想的枠組みである「大きな物語」が信用を失った現代では、個々の具体的な状況の中で思考する「小さな物語」がふさわしいと主張した(d)。

[イ]はc「西洋文明における科学の抽象的思考に対して、未開社会は西洋文明に劣らず厳密な深層構造があると考えた」が入る。レビュイ・ストロースは、未開社会の思考も、世界を詳細に分類し、秩序づけ、体系化する厳密な論理性を持つと主張した。e「冷戦後、イデオロギーの対立がなくなった代わりに、宗教対立などの「文明の衝突」が起こるようになるとえた」のは、ハンチントンである。

問4 [32] 正解②

文部科学省「初等中等教育における国際教育推進検討会報告——国際社会を生きる人材を育成するために」(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/026/houkoku/attach/1400589.html)を資料とする設問である。

②は適当でない。多様な他者の中で、自己を確立し相互理解を深め、共生していくためには、対話を通じて、人との関係を作り出していくような力が求められる。このように資料は述べており、相互に対立しないように「自

己主張を抑え」ことが必要であるとは述べていない。

①は適当である。資料は、一国の利益追求のみによらない全地球的視野や国際社会に貢献しようとする公共心を育成していくことが必要であると述べている。

③は適当である。資料は、自分の考えや意見を自ら発信し、他者の主張を受け止め、議論をまとめあげ、具体的に行動することのできる態度・能力が必要となると述べている。

④は適当である。資料は、相互の歴史的伝統・多元的な価値観を尊重しつつ、多様な異文化や人々の生活・習慣・価値観について違いを違いとして認識し、創造的な関係を構築する態度や能力、他者とのかかわりを通して問題を解決し、葛藤や対立を乗り越えてよりよい人間関係を作り出そうとする態度や能力が重要となると述べている。

問5 33 正解 ⑥

「他者」について考えた思想家について判断させる設問である。

アはa「レヴィナス」の説明である。レヴィナスは、フランスの哲学者で、貧困、暴力、死の恐怖に脅える他者の「顔」が私の世界を突き破り、倫理的な命令を呼びかけると考えた。

イはc「サルトル」の説明である。サルトルは、フランスの哲学者・文学学者で、人間は「対他存在」として相手の身体を物体化し、自由を奪い合う相克関係にあると考えた。

ウはb「ヤスパース」の説明である。ヤスパースは、ドイツの哲学者で、「彼が彼自身でなければ、私は私自身にはなり得ない」と述べ、「実存的交わり」によって実存としての自己が開明されると考えた。